

琉球大学学術リポジトリ

形容詞述語文についての一考察（2）： 「うれしい」の誘因について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系 公開日: 2009-07-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 克哉, Kinjo, Katsuya メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/11147

形容詞述語文についての一考察（2）： 「うれしい」の誘因について

金城 克哉

0. はじめに

従来の形容詞研究は形容詞というカテゴリー内の分類、特定の格との結びつき、3人称主語の制限などが主要テーマとしてとりあげられてきた。^(注1) 金城（2008）では「たのしい」が述語文に現れる際の誘因について取り上げたが、本稿では「たのしい」と比較対照される「うれしい」という感情がどのような誘発要因（以下、誘因と省略）によって引き起こされるものであるのかという点について、「～のは／のがうれしい」ならびに「～ことは／ことがうれしい」という述語文内に現われる補文を手がかりに考察する。今回は「うれしい知らせ」のような連体修飾は考察の対象外とした。以下、まず五つの先行研究を概観し（セクション1）、それらの研究における問題点を指摘する（セクション2）。考察（セクション3）では今回収集した354例のデータをもとに（i）「～の／こと」内で誘因がどのような表現形式で表されるのか、（ii）「うれしい」の感情主体と誘因はどのようにかかわっているのか、（iii）感情主体以外の第三者が誘因事象とかかわりを持つ場合、それはどのようなありかたであるのか、という三つのポイントを中心に議論を進める。

1. 先行研究

ここでは「うれしい」という感情を引き起こす誘因について触れた代表的な研究を二つのグループAとBに分けて取り上げ、概観する。最初のグループAでは主に「うれしい」と「たのしい」の対比と、それを通して得られたそれぞれの形容詞の意味記述にかんする研究である。山田（1982）と菊地（2000）は誘因の内容について、藤田（1991）は感情の生起と誘因の時間について論じている。これら三つの研究は山田から順に意味記述にかんして議論が進展してお

り、一つのグループとしてまとめることができる。次のグループBでは上記の研究とは無関係ではないものの、誘因について独自の見解を述べているもので、山本（1990）と加藤（2001）を取り上げる。

グループA

1-1. 山田（1982）

山田は次のような例を引き、「そのウレシサはいつでも、これらの出来事の直後に生じる」とする（1982：113）：

（1＝山田の（!））　試験に合格してウレシイ。

また、「うれしい」は特定の一つの事柄にかかわるものであり、それを「快として認知した瞬間に生じる感情」であり（1982：114）、「受動的」なものであるとする。ほかにも本稿との関連で次のような重要な指摘を行っている。

- ① 誘因には主体の意識的・無意識的な欲求、好みにあう物事の実現などがある。
- ② 事柄の認知という点から、誘発要因そのものは「瞬間的」なものである。
- ③ 誘因（＝快と認知する事柄）の内容は個人と直接の関わりをもつものである。

1-2. 藤田（1991）

藤田は「うれしい」と「たのしい」についてその感情の発生と誘因との時間的制約を検証し、「うれしい」については誘因の前であっても、同時であっても、また後であっても感情が生じ、さらには「誘因と感情の結びつきが恒常的な、時間を超えたものになっていると考えられるもの」もあるとしている（1991：85）。このことから、「うれしい」の場合には誘因の生起とは無関係に、「誘因が認識された直後（あるいは認識されると同時に）に生じる感情」と結論づけている（1991：81）。また、山田（1982）のいう、「うれしい」はできごとの直後に生じる感情であるという点について、誘因が未来の出来事となる例を引き、「うれしい」と言う場合、「できごとから時間が経過した場合には、特別な場面

が必要になる」という但し書きが必要になるであろうとしている（1991：75）。

1-3. 菊地（2000）

菊地は、上記山田（1982）および藤田（1991）の研究を参考しつつ、「うれしい」は何よりも「触発された心の動き」についての表現であるとする（2000：155）。誘因となる事柄については以下のような制約があるとする：

- ① 話し手を益する、直接的・積極的ないいこと
 - ② それほど実現しやすくないこと（実現する確度・頻度がそれほど高くなないこと、実現にあたって苦労をともなうことなど）
 - ③ 誘因の実現を話し手（当該人物）が完全にはコントロールできないこと
- こういった制約を考慮し、「うれしい」の意味を次のように捉える：

「いいこと＝自分（当該の人物）を直接に益することで、それほどは実現しやすくなく、自分ではその実現を（完全には）コントロールできないこと」がおこり、あるいはその実現が間近に迫り、それに触発されて起こる、「快／喜び」の感情（2000：153）

グループB

1-4. 山本（1990）

山本は感情を表す形容詞は概略次のような意味的・語用論的特性があるとし、こういった特性をどの程度満たしているかによって感情形容詞としての特徴が強く現われるかどうかが決まるとする：

- ① 人の限定性
 - a. 主体者性・体験者性
 - b.（体験者の）個別性・特定性
- ② 原因の限定性
 - a.（原因の）個別性・特定性
 - b.（原因の）一時性・出来事性

誘因（山本の言う原因）については、主に連体修飾用法、例えば「うれしい知らせ」とは言えても「*うれしい映画／物語」とは言えないことから、「『うれしい』は感情形容詞性が高いので一時性の強い出来事を要求する」(1990:60)とし、「*うれしい窓」は容認されないが「窓をつくってもらってうれしい」が言えることから「うれしい」の原因は特定の出来事が明記される（もしくは前提となっている）必要があるとしている。

1-5. 加藤（2001）

加藤は主に感情を表す動詞とそれに対応する形容詞を中心に観察している。本論の焦点となっている「うれしい」については『類義語辞典』を引き、例えば「*あの人はうれしい人だ」が非文となる理由として、「『嬉しい』が『自分が期待していたような状況の変化を知って起こる気持ち』を表す形容詞であるので、期待していた状況が何かということがわからなければ、聞き手は内容を予測しえないからである」としている（2001:51）。また、誘因を表す事象について、以下の文を比較する：

- (2) a. 私は美しい公園へ連れて行ってもらって、嬉しかった。
b. 私は美しい公園に連れて行ってもらえて、嬉しかった。

加藤は（2a）について非文とは言えないが、やや不自然な印象があるとし、その理由として、「授受動詞が結びつくことによって、恩恵の授受の意味が生じるためである。『わたしは美しい公園に連れて行ってもらった』という文が、すでに自分が恩恵を受けて、『嬉しい』『ありがたい』という思いを表しているので、そこにもう一度感情を表す『嬉しい』を付ける必要がない」ためであるとする（2001:58）。一方、加藤は（2b）を正しい文とし、それは「前件に可能形を使うことによって、恩恵の授受に伴う話し手の感情の表現を、『公園に連れて行ってもらえる』という状況の表現に変えたから」であるとする（2001:58）。

2. 先行研究の問題点

以下、前節で概観した先行研究について、収集した用例をもとに誘因と感情の発生時間、誘因の瞬間性、主体への直接関与、誘因の実現困難性、恩恵と状況表現の五つの問題点を指摘していく。

2-1. 誘因と感情発生の時間

藤田（1991）が指摘しているように、「うれしい」という感情がおこるのは誘因の発生直後であるという山田の指摘は強すぎる。「うれしい」と感じる主体がその誘因を「快であると認知した瞬間」（山田1982）に生じるものであるというやや大まかな制限があるとしてよいだろう。次の例を参照されたい：

(3) ようやく使い方を覚えた電子メール。メールを使ったやりとりが日に日に増えてくるのはうれしいものだ。半面、メールや通信相手が増えたことでいろいろ面倒な問題も出てくる。
(日パ1998. 5)

(4) 「…日本人の生活に、環境面で貢献できたのはうれしい」と幸野は話す。
(日エ2005. 5)

「メールを使ったやりとりが日に日に増えてくる」という事柄は過程を指しており、誘因が完了しているとは言えず、事態の発生という起点のみに視点を置いた山田の指摘は強すぎることがわかる。また、(4)でインタビューを受けている幸野という人物はインタビューを受けている時点で「うれしい」と感じてはいるが、日本人の生活に貢献するような出来事が起こったのはインタビュー以前の過去の出来事であると推測される。これらのデータを考慮すると、藤田のいう「できごとから時間が経過した場合には、特別な場面が必要になる」という指摘も首肯しがたい面がある。過去の出来事に対して現在の時点で「うれしい」と感じるというのは、「特別な場面」に限ったことなのではなく、やはり「うれしい」と感じる主体の認識の問題なのではないだろうか。また、過去の出来事自体が瞬間的なものであったとしても、コンテクストから（言外の意

味として) 現在にまで影響を及ぼしていると考えられる出来事の場合には次のデータが示すようになんら不自然さは感じられない:

- (5) 今日は奮発して近江牛で焼き肉をしようと思ってきました。けっこう品揃えが多くて満足しています。それと、この辺りは水があまり良くないの
で、お水のサービスが始まったのはうれしいですね。 (日食2003. 10)

「水のサービスが始まった」というのは過去の出来事の開始を指したものであり、レストランがそういったサービスを始めたのがそう遠くない過去だとしても、「うれしい」と感じているのはその「直後」であるとは言えない。サービス開始という出来事によって、客は現在でもそのサービスを受けられるのであり、この例では「お水のサービスが受けられるのはうれしいですね」といつているのと実質大差はない。

2-2. 誘因事象の瞬間性

山田（1982）は事柄の認知という点から、誘發要因そのものは「瞬間的」なものであるとしている（山本1990の原因の限定性 b も同様の主旨である）。2-1で見たように誘因の生起と感情の発生ということが問題になることがあるということから、藤田（1991）も明言はしていないがこの点を受け入れていると考えられる。しかしながら、感情の主体が出来事を認知するということと、その出来事が瞬間的な性質をもつということは別物であろう。また既にみた(5)の例からも言えるが、誘因となる出来事が起こった結果、ある状態が持続している場合にも、その状態の認知から「うれしい」という感情がおこるものであると考えられる。さらに、以下のデータが示すように、誘因となる事象は動的な事柄を表す出来事であるとは限らない：

- (6) 娘と友達と3人で、近所の基山市から車で通っている。マシンジムは毎日利用している。プールも週に3回は入る。やはり診療所があるのはうれしい。 仮に具合が悪くなった時も診てもらえると思うだけで安心感がある。
(日ア2004. 4)

(7) 寝たきりの夫を付き添う条件で入居した。部屋の狭さと看護婦がないのは不満だが、賃貸なので許せる。話し相手がいるのはうれしい。

(日ア2004. 4)

(8) それでもまだ、一人で行く度胸はないですね。あと、社内の対人関係でストレスがないのはうれしいです。上司に気を使うことなくいろいろ話せるので、コミュニケーションは図りやすいですね。 (日ソ1999. 7)

(9) 30分以上岩盤の上でひざを立ててあおむけになり、肩や腰をじっくり温めるのが彼女流の入り方。「整体に行く回数も減って、財布に優しいのもうれしい」という。 (日ヘ2007. 9)

(10) 子どものアートイベントで来た。今日が2回目。イベントが無料なのがうれしい。 (日ア2005. 5)

このように状態を表す事柄が誘因になるという点については3-2であらためて取り上げる。

2-3. 感情主体への直接関与

山田（1982）は「誘因の内容は個人と直接関わりをもつ」とし、菊地（2000）も「（当該人物）を直接に益すること」と指摘している。この点について菊地は次の文で表されるような「うれしさ」は「穩当ではない」とし、「品位の低さ」があるために容認できない（2001:151）といいう^(注2)：

(11=菊地の (22)) ライバルが大失敗して、うれしい。

本稿ではこの例は容認可能だと見る。「ライバルが失敗すること」が感情主体を「直接に」益しないというのであれば、誘因の直接性／間接性には当然幅があると考えられるため、どの点から「直接的だ」と認められるか（もしくは

間接的であるか) を示さなければ分析としては不十分であろう。次のデータを見てみよう。

(12) 本書は、昨年出版された「Internetworking Technologies Handbook」
…の翻訳である。訳書にありがちな読みにくさがなく、こなれた日本語
になっていることはうれしい。 (日コ1998. 5)

(13) そんなことを言い続けてきたからでしょうか。ここ数年、全社の表彰制度では、研究所や生産技術部門などで、裏方的な役目を果たした社員が対象となる機会が増えています。「一緒に開発にかかわったんだから、表彰に加えてくれ」と、事業部サイドが求めてくるんです。また、世界的に名の知れている研究者でも、ある時は仲間が成果を出すのをサポートする。そうやって組織全体でヒットを作ろうとする体質になったことがうれしいですね。 (日ビ2007. 6)

(14) 毎週末に訪れるという親子三世代の家族連れは、「焼き肉だけでなく、お年寄りや子供も楽しめるメニューが充実しているのがうれしい。時間制限がないので、デザートまでゆっくりと過ごせるのも魅力」と満足げだ。 (日レ2002. 11)

(15) マンツーマン方式の英会話スクール。受講生のニーズや要望を聞いた上で、その人に合ったレッスンをカスタマイズしてくれる。銀座、新宿、池袋など首都圏のほぼ全校で早朝レッスンに対応しているのがうれしい。 (日W2006. 2)

翻訳書の日本語がこなれたものなのか、組織の体質がどう変化したのか、メニューの充実度はどの程度のものなのか、英会話スクールの対応状況はどうなのかなど、確かに感情主体を(結果的には)益するものとなっているということはできようが、「直接性」という点では疑問が残る。これは「何をもって快

と認めるか」という点ともかかわると思われる。

上記データが示しているのは、翻訳書の日本語や組織の体質変化、メニューの充実度、英会話スクールの対応などをまとめて外界の事象がどのように感情主体の目に映るか、ということが重要だという点であり、これらの事象が感情主自身を益する（＝快ととらえる）か否かは感情主のとらえかた次第であろう。まず誘因となる可能性のある外界の事象が存在し（もしくは何らかの出来事がおこり）、そのありかた（または結果）を自分にひきつけて考え、その上で「快・不快」の判断を下し、「快」であれば「うれしい」という感情が起こるのではないだろうか。

2-4. 実現困難な誘因

次に菊地が「うれしい」の感情主が自分（の意志）で実現をコントロールできないような事象が誘因となるとしている点について、次のデータを見てみよう。

(16) 技術者たちには挑戦する課題を与えます。「仲間と力を合わせて、それを解決してくれ。そうすれば消費者はとても興奮する」と私が言うことで、技術者は新鮮な気持ちでいられます。難題の中には、マイクロソフトにしか解決できないようなものもあります。世界を変える企業で働き、その成功に参加するのはうれしいことなのです。 (日ビ2005. 10)

(17) 子供の玩具（おもちゃ）はやっぱり広島より京都のほうが安くっていいものがある。京都でちょっと用があって降りたついでに、蛸薬師（たこやくし）のそばで玩具を買って来た。久しぶりで国へ帰って子供に会うのはうれしい。 (三四郎)

(18) オフィスでサッカー観戦が楽しめる。この画面サイズでボールを追うのは難しいが、やはりスポーツをライブで見るのはうれしい。

(日パ2003. 12)

- (19) 人をもてなし、喜んでもらい、コミュニケーションするのがうれしい。
歴史に敬意を払いつつも、未来に興味がある。 (日ビズ2004. 10)
- (20) 新しいパソコンを使い始めるのはうれしい。でもそれを快適に使うには
大切なデータの引っ越しが不可欠だ。 (日パ2005. 3)

「企業の成功に参加する」こと、「子どもに会う」こと、「スポーツをライブで見る」こと、「コミュニケーションする」こと、「パソコンを使い始める」こと、これらはいずれも感情主体のコントロールの範囲内のことがらであり、主体がそうしようと思えば、これらの事象が実現しないということもありうるものである。これについては3-3で詳しく見ることにする。

2-5. 恩恵と状況表現

加藤（2001）は「～てもらう」という表現に恩恵の授受という意味が含まれているため、それを誘因として「うれしい」を使うことはできない（不自然となる）としていたが、以下のデータが示すようにかならずしもこの議論は成り立たない：

- (21) 確かに「顔を覚えられて、親しい態度を取ってもらうのは嬉しい」(72%)
ものですが、慣れ慣れしいのは逆効果。「放っておいてほしい」(30歳男性)
のに、「コミュニケーションの取り方を誤解している」(32歳女性) 店も多
いようで……。 (日レ2002. 1)
- (22) 作成したプログラムをユーザーに使ってもらうのはうれしいことです。
でも、その結果が「動かない」「突然終了してしまった」ではがっかりで
すね。 (日ソ2001. 9)

また、加藤（2001）は授受表現が可能表現に変えられ、状態を表すようになれば不自然さは解消されるとするが、以下にあげるように「～ていただいたの

はうれしい」というデータもあり、また、「～てくれる」では可能表現への変更ができないにもかかわらず「うれしい」の要因として成立していることがわかる：

(23) 「うん、隠してもしょうがないから正直に言うけど、今回はこれまで以上に難しい課題がたくさんある。だからこそ、君の力が必要なんだよ」

「声を掛けさせていただいたのはうれしいんですが…。ここで決めるんですか」
(cf. 「声を掛けさせていただけた」) (日も2005. 5)

(24) それにしても、企業の方がNPOに興味を持ってくれるのはうれしいですね。これから時代は、企業とNPOのパートナーシップがますます重要になってきます。いつか一緒に活動できる機会があるといいですね。

(日工2005. 6)

3. 考察

3-1. 収集データ

本研究のために今回インターネットのWebサイトを利用し、雑誌記事から340例、文学作品から14例を収集、計354例を基礎データとした。収集の基準として誘因が示される部分が「～のが／のはうれしい」もしくは「～ことが／ことはうれしい」となっているものを中心とし、「～てうれしい」や「～と／ばうれしい」は参考程度に留めた。^(注3・4)

先行研究では誘因事象自体の瞬間性、事象の生起と「うれしい」という感情の時間軸上の関係、授受（恩恵）などの視点がとりあげられているが、まず表現形式と言う点から今回のデータを整理した結果を図1に示す。最も多かったのが「ハイビジョン放送が楽しめるのはうれしい」などの可能表現 114例(32.2%) であった。以下、「声を掛けさせていたいたのはうれしい」などの恩恵 35例(9.8%)、「選択肢が広がるのはうれしい」といった変化動詞30例(8.4%)、「シャレのわかる先生が多いのはうれしい」・「お風呂はバスタブがある日本式なのもうれしい」といった形容（動）詞・名詞述語27例(7.62%)、「部分

的に読める校正になっているのがうれしい」のように、「～ている」形式で状態を表しているものが27例（7.6%）、「文字の上下中央揃えが可能になったのはうれしい」のように動詞「なる」によって変化を表すものが24例（6.7%）、「そうやって感激してくれる人がいるのはうれしいものです」のような（非）存在形式が22例（6.2%）、「頼られるのはうれしい」のように「うれしい」と感じる主体が行為の受け手である受身表現が21例（5.9%）となっている。その他の項目（54例、15.2%）の中には、「ソフトの価格が下がっていくのはうれしい」のような補助動詞表現、「時々言葉のようにも聞こえるのがうれしい」のような知覚表現などが含まれる。

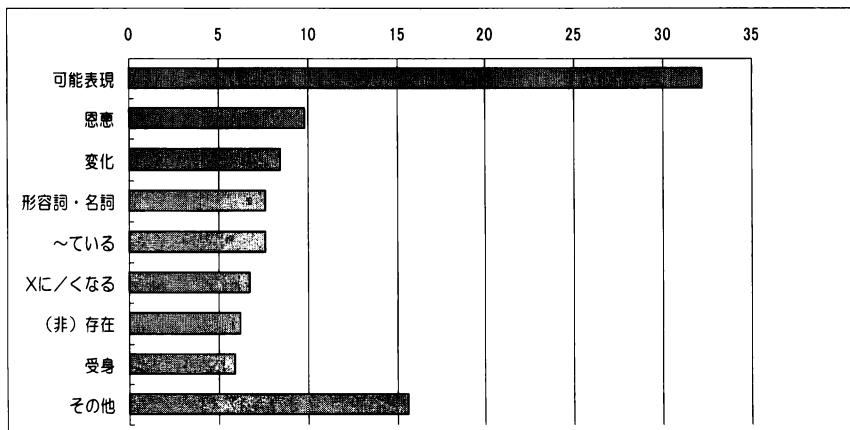


図1：誘因の表現形式別割合（%値）

この図から明らかなように、「うれしい」という感情を喚起する誘因には何かが現在可能な状態にある、もしくは過去にそういう可能な状態にあったという主体の認識が強く働く傾向があるといえるであろう。

3-2. 誘因としての「状態・状況」

上記分類項目としてあげた可能表現には張威（1998：256-257）のいう認識可能と能力可能が含まれるが、これらはそれぞれ「可能性の存在」と「能力の

「存在」を表すものであり、これに形容詞・名詞述語、「～ている」による表現、(非)存在を合わせると、データ全体の53.6% (190例) となる。これらは大きくなくくりとして「物事のありよう」もしくは「物事の状態」を表すとすることができる。

菊地 (2000) は誘因について「『いいこと…』がおこり、あるいはその実現が間近に迫り」と述べているが、これは何らかの出来事という時間軸上に起点と終点を想定したイベント性のある誘因を前提としているためである。上記見たように、「うれしい」の誘因となる事柄は何らかの状態であることもあり、それを「快」であると認識するかどうかがポイントとなっているということが言えるだろう。

3-3. 主体の関与

次に誘因となる事象に「うれしい」と感じる主体がどのようにかかわっているかを見てみよう。主体が能動的にかかわる事象を基本とし、それ以外にも本稿では上記とりあげた可能表現・受身・恩恵の授受・知覚表現を主体がかかわる表現であるとする。これら四つの表現形式によって表される事象はいずれも感情主体が自ら何らかの行動を起こすというような積極的な行動を表すものではない。しかし、主体の能動的側面を表す表現と対比することができること、そして能動的でない表現を一つにまとめてそこにどういう傾向が見られるかということを考慮し、今回これらを主体がかかわる誘因とした。

このように感情主体が能動的・受動的かを問わずかかわると考えられる誘因が今回のデータでは167例 (47%) あった。恩恵の授受については2-5で既に数例あげてあるため、以下、それ以外の例をあげる：

(17再掲) 子供の玩具（おもちゃ）はやっぱり広島より京都のほうが安くつていいものがある。京都でちょっと用があって降りたついでに、蛸薬師（たこやくし）のそばで玩具を買って来た。久しぶりで国へ帰って子供に会うのはうれしい。(三四郎)

(26) ここ数年、再開発のために、都内のあちこちで高層ビルが生まれていますね。それに伴い、オフィスの引っ越しをされた方も多いと思います。新しく、きれいなオフィスで仕事ができるのはうれしいのですが、困るのはビルの出入り。

(日ソ2005. 8)

(27) 若手のエンジニアに声をかけられるのはうれしいこと。遠慮してほしくない。

(日S 2007. 3)

(28) 今回、手術を受けたA氏（25歳）は…その後、右側の聴力を完全に失い、左側の聴力も巨大化した腫瘍の摘出手術で失聴、全聾となった。

電極の埋め込み手術後にA氏は、「人の声は雑音のように聞こえるが、時々言葉のようにも聞こえるのがうれしい」と、感想を語ったという。

(日メ1999. 10)

2-4で見たように、今回収集したデータのうち感情主体がかかわる誘因で、かつ主体のコントロールが可能な例が知覚表現を含め7例あった。菊地（2000）は誘因事象に「自分でその実現を（完全には）コントロールできないこと」という制限があると述べているが、データに見られるコントロール可能性からすると、この制限は強すぎるように思われる。今回収集したデータに現われたコントロール可能な述語は次のとおりである（「見る」は3例）：

「～に参加する」、「～に会う」、「コミュニケーションする」、「～を見る」、「～を使い始める」

コントロール可能であるとはいえ、これらの述語は「使い始める」を除き、いずれも他動性が低いという点で共通している。

これらの点をまとめると次のようになる。「うれしい」の感情主体は誘因となる外界の事象に単に反応するだけではない。自分が何かができるような環境にある、そういうたたかが（条件付にせよ）与えられた状況にあつたり（可能）、

外界や他人の影響を受けたり（受身・恩恵の授受）、見えたり聞こえたり（知覚表現）といったありかたで誘因とかかわりを持っている。これについては山田（1982）の「受動的」という指摘も当を得たものであると言えるだろうが、この「受動性」にかんしてはそういう「傾向がある」とするべきであろう。つまり、自ら行動を起こす場合もあるが、その場合には、主に「に」格や「と」格を伴うような述語で表現される、外界に対してそのもののあり方を著しく変化させることのないようなありかたで誘因とかかわることもあるためである。^(注5)

3-4. 主体以外の人物の関与

誘因となる事象は物事の変化である場合もあれば状態であることもある。上記3-3で見たように感情主体の誘因へのかかわり方にはある種の傾向が見られたが、主体以外の人物は誘因とどのようにかかわっているのであろうか。感情主に「益する」（菊地2000）ことが誘因の条件となるならば、他者の行為の場合、それは典型的に恩恵の授受という形で表されると推測されるが、次のようなデータも散見される：

- (29) 每年、冬場になると風邪やインフルエンザの患者さんで待合が非常に混雑します。多くの方が来院するのはうれしいのですが、「待ち時間が長い」「待合で風邪をうつされた」といったトラブルが必ず起きます。

（日ヘ2004. 11）

- (30) 来館者がよく「木に包まれているようだ」と口にするのがうれしい。
- （日ア2002. 10）

- (31) プロジェクトを統括した大林組東京本社土木技術本部の福本勝司統括部長はアンケート結果について、次のように話す。「来場者は建設にかかわる人が多かったので当然かもしれない。ただ、大勢の人たちが『好き』と答えたことはうれしい」。
- （日コ2006. 8）

この点を以下の作例をもとに検討してみる：

- (32=作例) a. ? 篠塚さんがうどんを作るのはうれしい。
b. 篠塚さんがうどんを作ってくれるのはうれしい。
c. ?? 篠塚さんがうどんを作つもらうのはうれしい。

(32a) は (32b) に比べ容認度が落ちるように思われるが、これは (32b) では誘因の「うれしい」の感情主への関与が授受表現によって明確となっている一方、(32a) ではそれが見られないためであると考えられる。また、(32c) では「うどんを作つもらう」という行為の恩恵にあずかるのは「篠塚」であり、「うれしい」の感情主とこの誘因事象とのかかわりが見えにくいために容認度は (32a) よりもさらに下がると思われる。このように、第三者が誘因にかかわる場合、「うれしい」と感じる感情主との接点（恩恵を授ける行為をするなど）が明確になれば容認度は上がるが、(29)–(31)のデータが示すように、あくまでそれは典型的なケースであると考えられる。

4. まとめ

本稿では次のことが明らかとなった：

- ① 先行研究では「うれしい」の誘因として何らかの出来事が前提とされていたが、出来事ばかりではなく、外界のある種の状態も誘因となる。
- ② 今回収集したデータでは①で指摘した状態の中でも、「～できる」といった可能表現を用いて表わされるような誘因が用いられる傾向がある。
- ③ 「うれしい」の感情主体も誘因事象にかかわることがある。それは「～もらう」や「～される」といった消極的なかかわり方が主であるが、他動詞を用いた（ある意味）積極的なかかわりもわずかではあるが観察された。しかし、その場合でも外界のあり方を著しく変化させるような他動性の強いものではない。
- ④ 第三者の誘因への関与は、感情主体を益するものである。これは典型的に表現形式としては恩恵の授受「～てくれる」や受動態での動作主の（非）明

示という形で表されるが、必ずしもそういう形式をとらないこともある。

上記明らかになった点を踏まえ、本稿では菊地（2000）の記述を修正する形で「うれしい」の意味記述を以下のように提案する：

自分（当該の人物）が外界の状況・出来事に接し、それが直接的であれ間接的であれ、自分に益するものであると認識した際に起こる「快／喜び」の感情。誘因となる外界の状況や出来事に感情主がかかわる場合、何かが「できる状況」にあったり、第三者に恩恵を受けるような場合が多い。積極的に誘因事象にかかわる際にも外界のあり方を著しく変化させるような他動性の強いものではない。

本稿では「うれしい」が述語文で用いられており、かつ「～のは／のが」や「～ことは／ことが」といった補文において誘因が示されるようなケースのみを扱った。連体修飾用法については別途考察が必要となるが、出来事性や状態性を表す名詞も上記指摘した点を備えたものであろうことが予想される。それについては今後の研究課題としたい。

注

1. 金城（2008）でも触れたが、それに補足する形で簡単に形容詞についての先行研究をまとめておく。形容詞述語文で格の問題を扱ったものに新屋（1995）・浅山（2000）・中村（2006）がある。大曾（2001）・王（2004）・外崎（2006）は感情形容詞の主語にかかわる人称制限を、劉・吉田（2003）は感情および感覚表現とモダリティを、副島（2001）は形容詞の述語形式を、それぞれ扱っている。
2. 菊地が論拠としている穏当さや品位の高低などは価値判断であって、対象となる言語表現が日本語として容認可能なものであるのかどうかとは異なるレベルの話である。極端な例であるが、サドマゾヒズム嗜好の者であれ

ば、次のような文も容認可能となるであろう：

(作例) ご主人様にいじめられてうれしい。

被虐は大部分の者にとって「益しない」行為だと捉えられるであろうが、それだからといって、日本語としてこの文が容認されないとは言えない。

3. 八亀は感情の誘因（八亀の言う「属性主」）が過去の出来事の場合、「過去の出来事+て／で」の形となり、「のは」を用いた補文は翻訳調になるとしている（2001：73）。これは「過去の出来事」に限ったことであり、反復事象や現在の事柄を表わすような場合、次の例が示すように「て／で」を用いると意味が変化する：

(i) 今はちょうど、社員・アルバイトの募集面接をしているところ。飲食業を志す若いヒトたちに会えるのはうれしいね。 (cf. 会えてうれしいね) (日レ2007. 10)

翻訳調になるからといって、誘因が示せなくなるわけではない。また、本文でも触れるように「のは／が」や「ことは／が」という補文によって誘因を提示する例がかなりある。誘因の提示はこればかりではなく、西尾（1993）が指摘しているように条件節である場合もある。本稿ではこのような誘因事象が文法的にどういった形式で提示されるのかという問題を保留にし、「うれしい」という感情がどういった誘因事象によって引き起こされるのかに焦点を合わせる。そのため、今回は「のは／が」や「ことは／が」という形式のみを扱う。

4. 今回のデータ収集では、平成19年度に琉球大学がトライアル版として導入した日経BP記事検索サービスを利用した。これは日経BP社発行の雑誌約40タイトルの記事検索ができるというもので、「うれしい」を含む記事を検索し、表示順に収集したものである（340例）。それと平行し、インター

ネットの「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>) から14例を収集した。データに付した「日エ」や「日レ」などの略語はそれぞれ以下の雑誌名・書名を指す：

「日ア」：『日経アーキテクチュア』	「日エ」：『日経エコロジー』
「日コ」：『日経コンピュータ』	「日ソ」：『日経ソフトウェア』
「日パ」：『日経パソコン』	「日ビ」：『日経ビジネス』
「日ヘ」：『日経ヘルス』	「日メ」：『日経メディカル』
「日も」：『日経ものづくり』	「日レ」：『日経レストラン』
「日食」：『日経食品マーケット』	「日S」：『日経SYSTEM』
「日W」：『日経WOMAN』	「三四郎」(夏目漱石)

5. 外界のあり方を変化させるような述語、例えば動詞「食べる」を使った以下の文を比較してみると、可能表現による状態を表した誘因が容認度が高いことが確認できる（「～て」を用いて誘因を示す）：

- (作例) a. ?好きなケーキを食べてうれしい。
b. 好きなケーキが食べられてうれしい。

参考文献

- 浅山佳郎 (2000) 「感情動詞の補足語の格と感情形容詞」『神奈川大学言語研究』 Vol.22, pp.57-72.
- 王安 (2004) 「現代日本語における感情形容詞の主観性について：人称制限を中心として」『研究論集』 北海道大学大学院文学研究科, Vol. 4, pp. 227-239.
- 大曾美恵子 (2001) 「感情を表わす動詞・形容詞に関する一考察」『言語文化論集』 名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科, Vol.22, No. 2,pp. 21-30.
- 加藤由紀子 (2002) 「感情表現における動詞とその周辺」『岐阜大学留学生セン

- タ一紀要』 Vol.2001, pp.47-59.
- 菊地康人 (2000) 「タノシイとウレシイ」『日本語 意味と文法の風景』ひつじ研究叢書 (言語編) 第21巻, 東京: ひつじ書房, pp.143-159.
- 金城克哉 (2008) 「形容詞述語文についての一考察: 『楽しい』の補文制限について」『欧米文化論集』琉球大学法文学部, Vol.52, pp.1-20.
- 新屋映子 (1995) 「『彼女を好きだ』という言い方: 感情形容詞の他動性について」『桜美林論集 一般教育篇』 Vol.22, pp.93-103.
- 副島昭夫 (2001) 「日本語形容詞の述語形式について」『東京大学留学生センター紀要』 Vol.11, pp.45-78.
- 張威 (1998) 『結果可能表現の研究: 日本語中国語対照研究の立場から』 日本語研究叢書10, くろしお出版
- 外崎淑子 (2006) 「日本語の主語の人称制限」『Scientific Approaches to Language』 神田外語大学, Vol.15, pp.149-160.
- 中村亜由 (2006) 「形容詞と格助詞『に』」『立教大学日本文学』 Vol.96, pp.117-130.
- 西尾寅弥 (1993) 「喜び・楽しみのことば」『日本語学』 Vol. 12, 1月号, pp.14-22.
- 藤田佐和子 (1991) 「『たのしい』と『うれしい』: 誘因と感情の時間的関係を視点として」『金沢大学国語国文』 Vol.16, pp. 86-75.
- 八亀裕美 (2001) 「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究』 大阪大学文学部日本学科 (言語系) 別冊 1
- 山田進 (1982) 「ウレシイ・タノシイ」國廣哲彌編『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』 平凡社, pp.112-120.
- 山田進 (2005) 「感情語の意味をどう記述するか」『聖心女子大学論叢』 Vol. 104, pp.242-224.
- 山本和之 (1990) 「感情形容詞の意味論的・語用論的特性」『山口大学英語と英米文学』 No.25, pp.57-61.
- 劉笑明・吉田則夫 (2003) 「感情・感覚表現におけるモダリティの体系と構造」『岡山大学教育学部研究集』 Vol.123, pp.195-207.

A case study of Japanese emotional adjective *ureshii* and its triggering causes

Abstract

This paper examines what kind of events/states causes a person to have emotion “*ureshii*” by examining so-called adjective predicate construction. Examination of 354 cases clarified the following points:

- (i) It was assumed in the previous studies that the emotion is caused by some events. However, it was found that some state (something is being in a certain situation) can be a cause.
- (ii) Among these states of affairs, especially one third of the causes express situations where the person can do something.
- (iii) The person who feels *ureshii* generally has this emotion in response to the surrounding states/events, but s/he can be a part of the states/events. In such a case, more or less s/he receives some benefit from somebody or s/he is done something by somebody. When s/he is an agent of an event, the verb expressing the event does not indicate high transitivity.
- (iv) The third person typically concerns the causing event by giving benefit to the person who feels *ureshii*.